歴史家の旅と歴史家の任務
大正デモクラシー期の歴史家坂口昂について

上野隆生　所員／現代人間学部教授

――はじめに

坂口昂（さかぐち　たかし、1872―1928年）の名は、現在ではほとんど聞かれることはないだろう。だが、少なくともアジア・太平洋戦争以前において、坂口は日本における世界史の大家であり、中等教育課程における教科書の代表的執筆者の一人であった[1]。その専門領域は、古代ギリシア・ローマ史ということになろうが、本論で述べるように、坂口は該博な知識と広汎な視野を有していた[2]。その意味では、坂口は世界史を専門とする歴史家であったというべきであろう。また坂口は、第一次世界大戦前から1920年代後半にかけて精力的に活躍した。そこで、坂口を大正デモクラシー期の歴史家といっても大過ないであろう。

本稿は、その坂口が1922（大正11）年に半年余りの期間をかけて欧米を巡遊した見聞の内容を主な素材として[3]、第一次世界大戦後のヨーロッパ情勢と世界を坂口がどのように見たのか、そしてその基盤となった坂口の史観を検討することを目的とする。

坂口は、第一次世界大戦前に3年ほどイギリス・ドイツに留学した経験を持ち、

（1）坂口は、文部省の「高等学校高等科歴史教授要目制定会議」の委員でもあった。村川堅固によれば、1924（大正13）年暮れに同会議の開催にあたって文部省は、「博士[坂口]と一高の齊藤教授と私[村川]とに原案を作製せしめた」という。坂口は会議前に上京し、原案作成後坂口は帰京したが、その車中からも一書を発し、気づいたことを細かく注意するなど熱心かつ細心に関わっていた（村川堅固「坂口博士を偲ぶ」、京都帝国大学文学部内京都文学会『芸文　坂口博士追悼号』第19年第5号、1928年5月20日、41頁）。なお、「齊藤」は、東京帝国大学助教授・東京女子高等師範学校教授の齊藤清太郎ではないかと思われる。齊藤清太郎には、『新編西洋史教科書』明治書院、1913年、や『最近西洋史講話』明治書院、1918年などの著書がある。

（2）坂口の主著は、以下の通りである（括弧内は初版の発刊年）。『世界に於ける希臘文明の潮流』（1917年）、『概観世界史潮』（1920年）、『ルネッサンス史概説』（1930年）、『世界史論講』（遺稿、1931年）、『独逸史学史』（1932年）。また、主な訳書には、リース『世界史の使命』（1922年）及びベルンハイム『歴史とは何ぞや』（共訳、1922年）がある。

（3）坂口昂『歴史家の旅から』中公文庫、1981年（原著は1923年刊）。本稿では、品切れとなっているものの、比較的に入手の容易な中公文庫版によることとする。

その際の所感も含めて第一次世界大戦後の印象をまとめている[4]。その際、「旅の印象記は詳しく書き立てるのが却って容易く、簡にして要を得るのがすこぶる困難であろう」が、「私は世間に対するつとめという考えから、敢えてその困難なるものを取り、因って自ら制し自ら努めて、出来るだけ簡にして要を得るのを期した」と記している[5]。

大正デモクラシーと称されるこの時期に、一人の歴史家がヨーロッパの変容をどのように捉えたのか。そしてそのように捉えた坂口の歴史観は如何なるものであったのか。戦後民主主義を否定的に捉えようとする風潮が高まり、歴史学と歴史家の位置づけが軽味を増して揺らいでいる感のある今日において、これらを検討することは決して無意味ではないと思われる[6]。

以下、叙述の順序としては、まず坂口の経歴を概観し、1922年の欧米巡遊の概要を述べることとする。その上で、坂口の歴史観とその歴史学の特色に触れながら、第一次世界大戦後の状況における坂口の観察や指摘を検討したい。

1――坂口昂の生涯

坂口は、1872（明治5）年1月15日、兵庫県有馬郡大沢村字日西原（兵庫県神戸市北区大沢町）に坂口九兵衛の三男として生まれた[7]。代々庄屋の家柄であったが没落し、坂口は5、6歳の頃大阪に養子に出された。その養家も破産したため、再び実家に戻るという変転の多い幼少期を送った。そして、1886（明治19）年、大阪中学校に入学、呉服屋に下宿して住み込み奉公の形で通学したという。だが、最終学年時に病気で長期療養を余儀なくされ、一年遅れて1890（明治23）年に第三高等中学校に移籍編入した。この三高時代の同期に浜口雄幸、幣原喜重郎、大平駒槌などがいる。三高時代も病気には悩まされたらしく、坂口と40年来の旧友であった桑原隲蔵も、高校から大学にかけて坂口はよく病気にかかったと回顧し、1891（明治24）年秋に盲腸炎で危うく命拾いしたことを記している[8]。1892（明治25）年に東京帝国大学文科大学史学科に入学した坂口だが、1895（明治28）年初夏、あと一月あまりで卒業という時期に、呼吸器を損傷してしまい、医師の勧告で一年休学をすることとなった[9]。さらに授業料未納で一年遅れの試験が受

（4）同前、9頁。
（5）同前。
（6）なお、本稿は2006年度の世紀転換期研究会（「日本近代化の問題点―明治国家形成期の明と暗―」）で筆者が行った報告をもとにしている。
（7）以下、坂口の経歴については、特記しない限り、坂口遼（坂口の二男）編『ある歴史家の生涯　坂口昂とその家族たち』自費出版、1978年、及び、「故文学博士坂口昂君略歴」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、86-87頁による。
（8）桑原隲蔵「坂口博士についての追憶」京都帝国大学文学部内京都文学会『芸文　坂口博士追悼号』第19年第5号、1928年5月20日、21-22頁。
（9）桑原、同前、21頁。

験できず、二年間休学する結果となり、1897（明治30）年に東京帝国大学文科大学史学科を卒業した。

卒業後は、和歌山中学に一年間勤務した後、第三高等学校教授となり、西洋史を担当した。この間も「過度の勉強のため」、1905（明治38）年から1906（明治39）年にかけて、「可なり強い神経衰弱に悩まれ、一時は奥様も心配された程であったが、幸に間もなく快癒した」という[10]。

1907（明治40）年に京都帝国大学文科大学史学科が創設されると、坂口は助教授として着任し、史学地理学第一講座を分担することとなった。1897（明治30）年に創立された京都帝国大学は、官吏養成を主務とする東京帝国大学に比して、「大学らしき大学」と評されていた[11]。そのことは、坂口の歴史学にも少なからず影響を及ぼしていたと考えられる。

そして、1908（明治41）年11月20日、「史学研究の為満三年間独英仏ノ三ケ国ヘ留学ヲ命ゼラ」れて、翌1909（明治42）年3月27日に留学の途についた。イギリスを経て、1909年11月にはイギリスからベルリンへ移り、ベルリン大学に在学して歴史学を学んだ（専門は西洋古代史）。またベルリン留学中の1910（明治43）年9月には、朝永三十郎・佐々木惣一とともにワイマールを出発点として、アイゼナハ、フランクフルト、ハイデルベルク、ミュンヘン、レーゲンスブルク、ニュルンベルク、ライプチヒというルートで南ドイツを回遊している（9月22日ベルリン帰着）。さらに、1911（明治44）年1月16日に東部地中海沿岸旅行へ出発し、トルコ、エジプト、ギリシア、イタリアなどを歴訪して、3月31日にベルリンに帰着している。ちょうどこの頃、1911年春に朝鮮総督府の依頼で『獨逸帝国境界地方の教育状況』をまとめ、同書は朝鮮総督府から1913年に刊行された[12]。

1911年12月25日に帰国すると、翌1912（明治45）年1月には京都帝国大学文科大学教授に任ぜられ、史学地理学第三講座担任となった。1913（大正2）年2月に文学博士となり、1924（大正13）年1月24日から1927（昭和２）年4月5日まで京都帝

（10）同前。

（11）この点に関して、帝国大学令などで新進の京都帝国大学を「牽束」し、その制度を完備させないようにしている憾みはあるものの、京都帝国大学は「東京大学の小学校的、監督的、圧制的、注入的、器械的なるに比すれば、さらに大学風にして、さらに放任自由の主義を採用し、さらに開発的活用的の精神を加えて、真に大学らしき大学の創立を見たるの実績、歴々として指摘し得べきものあり」との評価がある（斬馬剣禅『東西両京の大学』講談社学術文庫、1988年（原著は1903年）、25頁）。

（12）朝鮮総督府『独逸帝国境界地方の教育状況』朝鮮総督府、1913年2月。同書の冒頭には、「本書は明治四十四年独逸留学中の京都帝国大学教授文学博士坂口昂に嘱託して調査したるポーランド及エルザス、ロートリンゲン地方に於ける教育状況報告にして教育上参考となるへき事項尠からさるを認め茲に印刷に附したるものなり」とある。坂口の本調査に関しては、黒田多美子「一歴史学者のみたドイツ領ポーランドにおける教育政策――坂口昂『獨逸帝国境界地方の教育状況』をめぐって」、獨協大学外国語学部ドイツ語学科『ドイツ学研究』第21号、1989年3月、239-263頁、を参照。なお坂口は、ドイツ領ポーランドにおける小学校教科書を祖述しながら、歴史教育の状況を紹介している（坂口昂「独領ポーランドに於ける国史教育」（上）『歴史と地理』第1巻第2号、1917年12月、1-10頁、（下）『歴史と地理』第1巻第3号、1918年1月、28-33頁）。

国大学文学部長を務めた。この間、1921（大正10）年6月23日には「朝鮮支那へ出張ヲ命ゼラ」れ、同年9月26日に大学に戻っている。本稿でとり上げる「欧米各国へ出張被仰付」たのは1922（大正11）年4月1日で、同年12月16日に帰国している。「平素大そう摂生に注意して」いた坂口が[13]、急性肺炎で死去したのは1928（昭和3）年1月28日であった。

2――洋行と見聞
――第一次世界大戦後のヨーロッパ：『歴史家の旅から』の概要

1922（大正11）年5月、坂口は、東洋汽船会社の「天洋丸」に一等船客として乗船した。船中の様子から観察は始まっている。日本人乗客の増加振りと、それにも拘らず、英語の会話能力の低さと「茶の湯式の礼節に縛られている」日本人のマナーなどを指摘、却って「誤解を招き不利益を来す」結果となっていることを嘆いている。同時に、夫婦同伴の習慣のなさから日本人女性の少なさも指摘している[14]。坂口は船中でもスポーツや娯楽に関わる委員の会計担当をしたりして、快活に諸外国の人々と交流している[15]。ホノルル入港間際の5月下旬、坂口自身も、「幾多の異人種や、様々の使命を帯びた色々の職業風俗の人たちを乗せた船中の目狂はしい生活に入り浸つたこの旬日、とても纏つた勉強気分の起りさうにない」と述べている[16]。その中で唯一ひも解いたのが、『政治の棟梁』（*Meister der Politik*[17]、書名は坂口訳）所収のリース著「伊藤公」であった。リース（Ludwig Riess、1861 - 1928年、1887 - 1902年滞日）は、坂口が東京帝国大学で薫陶を受けた恩師であり[18]、坂口に「独逸史学の学風を植え」、「独逸史学を日本に伝へた恩人」

（13）喜田貞吉「坂口君を悼む」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、18頁。三高予科以来の知己である喜田が、「南北朝事件」で文部省を追い出された後、京大専任講師になった際に、「本当に同情して、いろへの注意を与へてくれたり、慰めてくれたりしたのは同君[坂口]であった」と記している（同前、17頁）。

（14）坂口、前掲『歴史家の旅から』、23-25頁。

（15）同前、26-29頁。

（16）坂口「日本のビスマルク」、坂口昂『世界史論講』岩波書店、1931年、752頁。

（17）Erich Marcks, Karl Allexander von Müller(hrsg.), *Meister der Politik*, 2 Bd. Stuttgart und Berlin, 1922.参考までに目次を紹介しておくことにする。第1巻：ペリクレス、アレクサンドロス、ハンニバルとスコピオ、シーザーとアウグストゥス、コンスタンティヌス、カール大帝、オットー大帝、グレゴリオ７世とインノセント3世、カール4世、スレイマン、カルヴァン、ロヨラ、フェリペ2世、リシュリュー、グルタフ・アドルフ、クロムウェル、第２巻：コルベール、プリンツ・オイゲン、ピョートル大帝、ホーツォレルン家の三大人物、ジェファソン、ナポレオン、メッテルニヒ、フライヘア・フォン・シュタイン、カヴール、リンカーン、グラッドストーン、ラッサール、ビスマルク、伊藤公。取り上げられている人物をみれば、編者の伊藤への評価の高さは異例とも思われる。

（18）リースの娘加藤政子によれば、ドイツ語のわかる学生は少なかったため、リースは主に英語で話していた。弟子の中には村上直次郎・阿部秀助らがよく大学構内のリース宅に出入りしていたという（金井円・吉見周子編著『わが父はお雇い外国人』合同出版、1978年、56-59頁）。その中に坂口の名は登場しない。

であった。そのため坂口は、第一次世界大戦後のドイツで「経済上窘迫に悩むこの旧師に慰問として、日本全国に於けるリース受業者から募られた若干金を贈呈されたこともあ」ったという[19]。また、訪欧の際にも坂口はリースを「バルト海辺の片田舎町に」訪問したという[20]。坂口は、「伊藤公」について、「可なりの造形的明確さを以て描き出されて居る」と評価した上で、『日本からの草々』（*Allerlei aus Japan*[21]、書名は坂口訳）の著者で「終始世界史的見地の高処に立」っているリースだからこそそれができた、と指摘している[22]。

坂口がサンフランシスコに着いたのは、6月初旬であった。カリフォルニア大学に続いてスタンフォード大学を訪問し、市橋倭[23]やP.J.トリートらと会っている。大学施設の充実振りに圧倒されると同時に、留学生の資質の変貌振りを嘆いてもいる。すなわち、明治年間は俊才が多かったが、次世代の子弟が多く来遊するようになると、成績の拙い者が増加するようになった。このような好ましからぬ対照をなしていると米国人の目には映っている。その一方で、中国からの留学生の資質の高さが一層浮き彫りになっている点も指摘している[24]。

その後、シカゴ、ピッツバーグ、フィラデルフィア、ニューヨーク、ワシントン、ボストンを歴訪して6月末にはニューヨークを出帆した。坂口は「欧米旅行中常に写真器を携へて」いたる所の史蹟を自ら撮影している[25]。

大西洋を渡り、シェルブールからサザンプトンに着き、ロンドンに到着した。滞在9日で同地を発ち、「一九二二年七月八日、土曜」にはウィンブルドンでテニスを観戦している。この記述はかなり詳細であるが、これは坂口が「無類のスポーツ愛好家」で、三高時代から庭球にいそしみ、長く京大庭球部長を務めたことと関わっている[26]。イギリス滞在中の記載は、1909年の留学中の所感を再録している部分が多いが、その中にもオックスフォード大学の学生生活における運動

---

(19) 安藤俊雄「恩師の追憶」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、48頁。

(20) 同前、49頁。もっとも、『歴史家の旅から』にはリースを訪ねたことは記載されていない。

(21) 全訳はないが、本書の抄訳としては、原潔・永岡敦訳『ドイツ歴史学者の天皇国家観』新人物往来社、1988年、がある。

(22) 坂口、前掲「日本のビスマルク」、前掲『世界史論講』、754頁。

(23) 市橋倭[いちはし やまと]は、ワシントン軍縮会議で加藤友三郎の通訳を務め、*Washington Conference and After*, Baltimore, 1928, などの著書がある（イアン・ニッシュ著宮本盛太郎監訳『日本の外交政策1869-1942』ミネルヴァ書房、1994年、150頁及び167頁の訳注参照）。

(24) 坂口、前掲『歴史家の旅から』、48頁。

(25) 市村輿市「恩師坂口先生を憶ふ」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、52頁。なお、市村は5月にニューヨークで坂口に会ったとしているが、坂口自身が「六月の初めの或る朝」にゴールデン・ゲートを通過してサンフランシスコ湾に入ったと記していることから（前掲『歴史家の旅から』、36頁）、記憶違いと思われる。

(26) 坂口遼、前掲書、122-128頁。この他、中学時代には柔道、大学時代には陸上競技に親しんだ他、三高時代には野球部創設にも関わった。坂口は「スポーツマン」で、「運動其のものゝの人生に於ける真価を理解し、運動そのものを享楽し、運動家を愛して之を鼓舞激励して居られた」と追悼し、坂口の死は京大学友会運動各部にとって「一大損失」であるとする指摘も見られる（市村、前掲「恩師坂口先生を憶ふ」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、50-51頁）。

の位置づけを記した箇所がある。試験期間であるにもかかわらず、「スポーツは決して平生と変って居らなかった」として、「運動は、……宗教的教育と相並んで車の両輪の如き関係をなしているかと思う」と記している[27]。

イギリスを後にした坂口は、ドーヴァー海峡を渡ってパリへ向った。ドーヴァー海峡に関して、坂口は再び1909年の滞英時の所感を引いている。当時、ドイツの海軍拡張に対して、イギリスの防禦策を巡る論議が盛んになっていた。その中で登場したのが、ドーヴァー海峡を飛行機で横断するという企画であった。冒険心のある二名が名乗り出て、一人は失敗したが一人が成功すると、懸賞金つきでそれを上回る速度で横断する者を募る者も出現するほど話題となったことを回顧し、ドイツがイギリスを空中から攻撃することが可能であることが明らかとなったため、一大不安を加えたと述べている。第一次世界大戦後の状況について坂口は、「多大の今昔感を催さざるを得なかろう」として、「国際関係」や「国防問題」という方面からだけでなく、「単純に飛行問題として考えても非常の変化に驚かざるを得な」いと記述している[28]。「文明の進歩」に「テクニック」が不可欠な「必要条件」であることは坂口の夙に指摘する点でもある[29]。

坂口は、パリの様子も簡潔ながら活き活きと描写している。ここでも1911年に訪れた際の印象と比較される。アブサンが禁止されて飲めなくなったことや、至る所で目に付いた貼り紙が姿を消してきたこと、また地下鉄の延伸ぶりなど、日常生活の目線でこの間の変貌振りが描かれている。好奇心の現われからであろう、坂口はいろいろな区域を逍遥しており[30]、カルチエ・ラタンやヴェルサイユ宮殿などの様子も活写されている。その中でも注目されるのは7月14日の記述である。フランス革命を記念するこの祭りは、「フランス国民に取りては極めて重要な意義を持っている」だけでなく、「世界のデモクラシーたるものは、すべてこの日を記念すべき筋合いになっている。」こう記した坂口は、続けて以下の叙述を残している。

> デモクラシーといえば、多くは平和を聯想し、モナーキと呼べば、直ちにミリタリズムを思うのが、私たちの習慣となっている。しかしデモクラシーも時にはミリタリズムを伴い、一大軍国を実現することがある。大革命が産み出した当時のフランスのデモクラシーは、実にそれであった、ディレクトル政治、コンサル政治、それからナポレオン帝国はその絶頂点を形作っている。

---

(27) 坂口、前掲『歴史家の旅から』、141頁。
(28) 同前、153-158頁。
(29) 坂口昂『概観世界史潮』岩波書店、1950年（改版）、327頁。
(30) オペラ座周辺で巡査にレストランの所在を尋ねた折に、「頗る貧しい」ことを告げたところ、「安からうわるからう」の「平民的レストラン」を紹介され、面食らったエピソードもある（三浦周行「坂口教授追憶録」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、37-38頁）。

私はたまたま会った巴里の七月十四日を、最初はただ平和の祭だと思うた。随ってサーベルや鉄砲の行列などがあろうとは予想していなかった。ところが、実際は、戦争以来久しく途絶えていた観兵式を行うというので、ここに八年目に大規模な閲兵が、大統領ミルランの面前で、壮んに行われたのだから、この日はまさしくフランス軍国の展観日で、戦捷国のさながら一大凱旋式であるかの如き趣を呈した。(31)

ドイツからの賠償金支払い延期の申し入れに対して、フランスはそれを拒絶するという状況下での「観兵式」再興は、「ドイツに対する一大示威運動」で、フランスには「居丈高な態度を示す必要があった」と坂口は解説している。

続けて、「フランスのデモクラシーの裡から、二十世紀の大ナポレオンが飛び出すだろうと暗示する者ではない」としながらも、「目下の形勢は、少くともルイ十四世時代の『レユニオン』時代に相当するようになりつつあるが如くに見える」と指摘する(32)。三十年戦争後のヨーロッパが疲弊した状況で、ルイ14世は強大な陸軍を背景に、ストラスブールを始めとして各城市を占領し、思いのままに行動した。これに類似しているのが、現況であるという。だが、第一次世界大戦でフランスは防禦戦に成功したに過ぎず、戦後財政は窮乏している。一方、

ドイツは国土の若干を削られても、なお人口衆多、人心剛健にして勤勉と経営とにおいて世界一の国民だ。いつ恢復して捲土重来するかも知れないにおいてをや。この相手が今日猫のようになって、支払い猶予の哀願するのは、確かに曲者だ、決して油断あるべからず。というのが、今日のフランスの政治家及びその国民の心中だと考えられる。彼らはこの危機に際し、挙国一致、飽くまでも全国を軍国的歩調に保ち、条約の許す限りの権利を、極端まで行使して、帝国主義的政策を展開するのは、目下最も機宜を得たるものと思うているらしい。(33)

以上の叙述からは、デモクラシーと平和、モナーキとミリタリズムの相関関係が単純に成り立つわけではないこと、国際関係を背景とした民衆心理と国家政策とが連関していることなどを坂口が十分意識していることがわかる。

7月10〜13日の間、坂口は、東洋学世界大会に参加した。その後、ランスの戦跡を見学し、ベルギー経由鉄道でベルリンに入った。「北フランス及びベルギーからドイツに入ると、戦争の破壊の跡方[ママ]は、自然の外観上にはほとんど見出さ

(31) 坂口、前掲『歴史家の旅から』、184-185頁。
(32) 同前、186頁。
(33) 同前、186-187頁。

れ得ない。……ドイツの国内は見るから、山河美わしく、植木茂り、田野整い、郡邑町村櫛比し、寺々の高塔相迎え、外観上昔に優るとも劣っていない。」[34] これが坂口の受けた第一印象であった。だが、「ドイツの人事と生活の内容とは、もはや前回滞独中のものではない」として、物価の高騰についてつぶさに叙述している。加えて、「テンペルホーフフェルト」の荒廃ぶりや「クロイツベルク」周辺の簡易住宅地化、「ポッツダマ・プラッツ」から「シェーネベルグ」にかけての寂寥とした状況などを挙げて[35]、「ドイツの時代変化」を指摘している[36]。坂口が「時代変化」というものを「極めて抽象的にかいつまんでいえば」、

> 重大な領土及び富源の喪失や莫大な賠償の賦課はいうまでもなく、帝政の没落、君主権の絶滅、軍備のほとんど撤廃に近き制限、共和国の建設、社会民主主義の支配、貴族及び軍人の閉息、セミチズムの隆盛（猶太人の跋扈）、資本家の飛躍、通貨の暴落、物価の狂気的騰貴、一般人民の乞食化、中等社会の沈淪、職業の実際的方面への転化、投機者流の横行、外国人の入国、就中、その遊覧客、留学生、亡命者の激増、工業の空景気、労働の需要、賃金の社会主義的設定、新階級の勃興、都会人口の膨張、恐るべき住宅難等これらである。[37]

そして、このような「大変化」は、

> 家庭生活はいよいよ破壊され、戦争中から既に不道徳に陥りつつあった一般、特に青年男女の風俗はますます堕落し、人心険悪となり、料理屋、カフェ、劇場、踊場は繁盛し、人々とかく刹那的快楽を貪り、勤倹貯蓄の風は著しく減退し、詐偽、盗難等の罪悪しきりに増加し、一般社会の不安と不愉快とを齎した

として、このような「種々の悲しむべき社会現象が新たに生れて来た」ことを嘆いている[38]。その上で、日常生活の具体的な局面での事例を挙げているが、その中から、外国人の流入とその評価に関する指摘を見ておこう。

「この夏の伯林といえば、全世界の外国人でうようよしていた。」[39]（傍点ママ）坂口はこう記している。マルクの暴落とドルやポンドの優位がその背景にある。

---

(34) 同前、203-204頁。
(35) 同前、204-206頁。
(36) 同前、207頁。
(37) 同前。
(38) 同前。
(39) 同前、214頁。

また、ロシア革命の影響でロシアからの亡命者も多く、そのためベルリンを始めとして住宅難が高まってきたことを記している。外国人に対する種々の課税や入国制限を求める声も上がっていることと同時に、坂口自身が旅行中に「ドイツ人から露骨に、一体君たちが悪いのだと話しかけられたことがしばしばあった」ことを披露し、「外国人に対して嫉妬とひがみとを以て臨んで来る傾きが多い」と述べている[40]。そして、そのような受け止め方も肯けるとして、「ドイツ人からみれば、これらは優勢な外国金力を以て内地人の面を張りに来た」に等しく、文字通りその通りの場合も少なくない、と坂口は指摘している。「金力で平和的蚕食を受けつつある」ドイツでは[41]、日本人観光客や留学生への悪評も生れていた。坂口は、これだけ多くの日本人が訪れれば、いろいろな人間がいるだろうとした上で、「一時這り込んだ通り過ぎの連中のうちには、成金や坊んちの類が少なからずあって、随分擯斥すべきことも仕出かし兼ねなかったろう」と述べ、留学生とは区別すべきことを説いている。それでも、「ドイツ人の神経は大いに昂ぶっているから、彼らに対して慎重な態度を取れと」忠告するのは忘れていない[42]。

8月11日、ドイツ共和国の憲法発布三周年記念日の式典の模様を、坂口は詳細に記している。自ら戦勝記念碑・ビスマルク記念像などを巡って議会に向った坂口は、駐ドイツ日本大使日置益[43]に同行して議場に入ることができたため、大統領エーベルトの演説も直接聴いている。さらに同夜「ルストガルテン」から「ジャンダルメン・マルクト」への炬火行進も見物している。

> 私が十年ぶりに伯林に入って具に感じ得た気分は、ドイツがこの間に少くとも無慮一世紀間の逆戻りしたのではないか、十九世紀初めの対ナポレオン時代乃至それに引きつづいた立憲運動時代と同じ困難に還ったのではないか、という心持である[44]

というのが坂口の感想であった。そしてこの炬火行進に加わる人の多さのほか、「総員が『ドイチュランド』と『インテルナチョナーレス』を取り交ぜて高唱するところに、時局の特徴が窺われる」と記している[45]。

当時のドイツ政情の困難さと共和国政府の苦心とを坂口は理解していた。「国

---

(40) 同前、216頁。
(41) 同前、218頁。
(42) 同前、220頁。
(43) 日置益（ひおき　えき、1861-1926年）1888（明治21）年東京帝国大学法科大学を卒業、1891年外交官補となり、各国に勤務。1914年中国公使となり、二十一か条要求を袁世凱政府に提出。1920年10月から1924年4月までドイツ駐箚特命全権大使を務めた（外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『新版　日本外交史辞典』山川出版社、1992年、860-861頁）。
(44) 坂口、前掲『歴史家の旅から』、236頁。
(45) 同前、240頁。

民が窮迫すると絶望のあまり、共産主義に走り、その果てはボルセウィキに陥るに至るかも知れない。もしくば、むしろ保守派の反動に応じて蹶起し、再び君主主義に復するかも分らない。」(46) こう述べて、共産主義・君主主義・分立主義を統一政府が警戒しなければならぬ三大要素であるとした。そして、「およそ社会党員は海千山千の連中で、浮世の世故には慣れているが、専門的知識と技術上手腕を欠いているから、社会党者流が実際政府機関の運転に当たってみると、思うようにこれを動かし得ない。どうしても党外の有能者を用いるの必要を感ずる。彼らは現に帝政時代以来の政治上の才幹ある者、官吏、学者、技術者らを使っている」と指摘、「思うに、今日のドイツの国際関係の逼迫と国内の不安の有様では、全国公民の共和統一という現在の国体より他に、より適切より確実なものはなかろう」(傍点ママ) と結論づけている (47)。このような都市部に比して、「田舎の地方」について坂口は好感を抱いたようで、「田舎」にも「都の労働争議や階級闘争が入り浸っていることは勿論であったけれども、都会に比して、なお頼もしい堅実の風が遺ってい、プロシャの精神の磅礴するのを発見した」(48) と記している。

坂口は、ヴィースバーデン、マインツ、ビンゲン、コブレンツ、トリアー、ストラスブール、サント・オディルなどライン地方とアルザス地方を回っている。特にアルザス地方では、占領中のフランスが「守備地に、アフリカからアラブ兵や黒人兵を呼びて用いたこと」から、坂口は、「そうでなくても悪まれているフランス守備兵を一層不評判にした」と指摘している (49)。このほか、守備兵と住民との間のトラブルが多発していることを述べるとともに、アルザスの田舎はよく整備され、ドイツ官民の腕前を想起させるとしている。そのためもあって、清潔と整頓に関してはドイツ人に軍配が上がるとして、

> フランス人が古来あらゆる文明開化の高さを維持しているにかかわらず、物事のさばき方や、町や家まわりの整え方については、ドイツほど十分でないようだ。もっともこれはドイツが十九世紀中葉以来、富の程度が充実し、社会教育の進歩し、科学思想が普及して来た結果かも知れない。それであるから、今日のようなドイツ全国のみじめな状態が持続すれば、ドイツ人の躾なり習慣がいつの間にか退歩して、不潔乱雑の生活に傾くの外なかろう。私のドイツ中を旅行したところでは、戦前に比してすこぶるその感が深かった (50)

(46) 同前、229-230頁。
(47) 同前、283-284頁。
(48) 同前、281-282頁。
(49) 同前、258頁。
(50) 同前、259頁。

とまとめている。

坂口は、8月下旬に開催される「ユーバーゼーヴォッヘ」(「海外週」)に合わせて、ハンブルクに丸一週間滞在した。同地滞在中には、「フリードリヒルーヘ」にあるビスマルク晩年の旧邸を訪問している。ドイツでは、フレデリック大王に次いでビスマルクが追慕されていることを述べ、

> 高処大局に立ちて卓抜な見地から、軍閥の跋扈を抑制し、欧州的外交と国家的政策とを展開し、一着また一着と地歩を占めて、遂にはドイツ帝国を建設したのは、ビスマルクその人であった。もし少(ママ)ウィルヘルムの晩年、第二のビスマルクが現われてドイツの帝国の上に立っていたならば、ドイツは全世界を引き受けるような、かような戦争の苦境に陥らなかったかも知れない。所詮、カイゼル政府には偉大なるステーツマンシップが欠けていることが、今日のドイツに古来未曾有の大困難を齎した最大原因であるに違いない

と、ビスマルクの手腕を評価している[51]。

ハンブルクでは、ケインズの講演を聴いたり、ポスターの多さに目を引かれたりしているが、経済活況に関する指摘は注目に値する。ハンブルクは日本でいえば横浜・神戸に当たるが、その「大きさと隆盛」は到底その比ではない、という。ロイター通信によると、1922年の船舶出入数で、ハンブルクはアントワープやロッテルダムを凌駕していると紹介、ドイツの好況ぶりを説明している。しかし、この「外観上」の好景気は、「その裏面には多大の悲観材料をつつんでいる」と続ける坂口は、その理由を次のように説明している。マルク暴落により、労賃と原料費が安くすむため、今のところ外国市場での需要は大きい。しかし、マルクが下落するほど輸出が増加して好景気になるという状況は、「決して正常ではない、空景気だ、正気の沙汰でない。」食料品や外国の原材料など、外国と決済することになれば、到底紙幣マルクでは決済できない。いつかは「カタストローフ」が来るだろう、と[52]。

曾遊の地ポーランドにも赴いた坂口は、グダンスク(ダンチヒ)に注目している。その理由は、

> ダンチヒは自由港国に化してポーランドの事実上支配に帰し、いわゆる「ポーランドの通路(コリドーア)」となっている。これと同時に西プロシャはポーランド領となり、東プロシャに通ずる「ドイツの通路(コリドーア)」となっている。いずれも皆不自

(51) 同前、280頁。既述のリース「伊藤公」についての論評を「日本のビスマルク」と題していることから、坂口の伊藤評も自ずから明らかであろう(注16、66参照)。
(52) 同前、275頁。

> 然だ。思うにシレジアと「通路」とは、あるいはヨウロッパ再大乱の因縁とならないとも限らない（ルビママ）[53]

というものであった。この予見は、20年を経たずに現実のものとなる。坂口の予見を賞賛するのは容易だが、むしろ坂口が感じた次のような不安感にこそ、歴史家としての坂口の本領が現われているのではないだろうか。

> 以上述べた形勢を観ずると、ヨウロッパの国際界はフランス軍国の下に、ルイ十四世のレユニオン時代、ナポレオンのライン同盟及び大陸封鎖時代に類するの禍の日が、まさにヨウロッパの頭上に落ち来たらんとする模様がある。[54]

坂口は、ヨーロッパ滞在の最後の約１か月間を南アルプスで過ごした。リンダウ、ボーデン湖、チューリヒ、ミラノ、ボローニヤ、ラヴェンナ、フィレンツェ、などを経て、10月17日にローマに到着した。30日にローマを発つまでの間、法王庁の文書館で閲覧したり、フォロ・ロマーノ遺跡を訪れた他、駐イタリア大使落合謙太郎[55]の便宜で、大使館差し回しの車で落合夫妻らとともにアッピア街道からアルビノ山道を周遊している。また、ナポリ、ポンペイ、ポッツオーリ（ナポリ近郊のカンパーニア州の町）へも足を延ばしているが、ナポリではファシスト党の大会（10月24日）に遭遇している。だが逆に、ファシスト党のローマ進軍（10月28日）時にはローマに帰着せず、ムッソリーニが組閣の大命を受けた29日に坂口はローマに戻ってきたようである[56]。ファシストのローマ進軍からムッソリーニの政権奪取への一連の動きについて、坂口は、「これまさしくロシアのボルセウィキの裏を行った一個の反動的クーデタだ。確かにナポレオンの出現だともいえる。その天下に及ぼすの影響太だ大なるものがあろう」と評している[57]。

11月初旬、マルセーユで「賀茂丸」に乗船した坂口は、スエズ運河を経由して12月16日朝に神戸に上陸した。

（53）同前、285頁。

（54）同前、288頁。

（55）落合謙太郎（1870-1926年）は、1895（明治28）年東京帝国大学法科大学を卒業、同年外交官試験に合格した。1905（明治38）年、ポーツマス講和会議には主席書記官として随行、その後ロシア大使館参事官、奉天総領事、イタリア大使館参事官、駐オランダ兼デンマーク特命全権公使などを経て、1920（大正9）年から駐イタリア特命全権大使を務めていた。ローザンヌ会議には全権委員として出席、1926（大正15）年帰国途中の船中で病死した（前掲『日本外交史辞典』、126頁）。

（56）坂口のローマでの行動は、大類伸「ツスコロの落栗」（故坂口博士羅馬滞在中の思ひ出）、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、4-15頁、に比較的詳しく述べられている。なお、坂口自身は、「羅馬からナポリ、ポンペイ、プゾリ[ポッツオーリ]への小遊の次、たまたまあたかもファシスチ団の全国大会がナポリに開かれ、都に帰ったら、この大会の威力は直ちに中央政府を倒して、ムソリニの内閣の樹立となったのを目撃した」と記している（坂口、前掲『歴史家の旅から』、295頁）。

（57）坂口、前掲『歴史家の旅から』、295頁。

3――坂口の歴史学

> 色々な研究とか読書とか云ふやうなものは旅行に於ける見聞に似た性質を持つてゐる。否それのみならずそれは生活そのものに於ける種々の出来事にさへ似通つている。……其処此処で我々の感得した巨大な印象、知らず知らずの中にか又は特に念入りの観察に依つてか我々のものになつた全体の概観だけが後までも残り我々の精神的財産の総計を増加せしめるのである。味はれた生活の最も重要な瞬間が記憶の中に集まりその溌剌たる内容を形成するのである。[58]

これは坂口が19世紀ドイツ史学を大成した歴史家と評する[59]レオポルド・フォン・ランケの言葉である。坂口は、“Labor ipse voluptas”（仕事は悦楽である）というランケの言葉の重要性を演習参加者に諄々と説き、後進の者からは坂口自身が「日本のランケ」であると思われていた[60]。

前節で概観したように、坂口は、日常生活の具体的諸相にも目線を配っていると同時に、「全体の概観」を忘れることなく重視し、把握しようとしている。坂口にとっての「旅行に於ける見聞」は、まさに研究や読書と同列のものであったといえよう。本節では、そのような坂口の歴史学の特色を検討してみたい。

坂口の最初の著作は、後に坂口の遺稿集を編纂する際に尽力することとなる中村善太郎との共著として、1909（明治42）年に出版された中等教育課程用の教科書『中等西洋通史』である[61]。同書は、おそらく三高での坂口の授業経験を踏まえて編まれたものと思われ、その「緒論」には、次のように記されている。

> 有史以来こゝに五千年、人類活動の世界は漸く広がりて、今や地球の全表面に亙りて、列国民の競争を現じ、その一角に湧く世相の一波一瀾は、忽ち諸方に及びて、到る處に利害関係の変動を起す。日本は世界の日本なり。吾人、日本国民たるものは、国史を学びて、内、わが国の発達を詳にすると共に、また外国史を修めて、外、世界の大勢の変遷に通じ、諸邦国の興亡、文明の消長を明にせざるべからず。西洋史は即ち東洋史に対して外国史の一半を成すものなり。旧くは西洋と東洋と相交渉する所、緊切ならずして邦国の盛衰多く相関せず、文明またその伝を異にしたれば、研究の便宜によりて、東洋

---

(58) ランケ著、相原信作訳『強国論』岩波文庫、1940年、7頁。
(59) 坂口昂『独逸史学史』岩波書店、1932年、140頁。
(60) 安藤俊雄「恩師の追憶」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、42-43頁。
(61) 坂口昂、中村善太郎共著『中等西洋通史』開成館、1909年10月初版、同年12月訂正再版。本稿では訂正再版を使用した。

史と西洋史を別ちたれど、近代に入るに随ひては、地球の全表面は次第に人類の共通の舞台と化し、東洋と西洋との歴史上の埒は全く撤せられ、殊に今日の所謂世界の文明の由来及び発達を見るには、西洋史の方面より研究するを便とす。およそ世態、人情、東西おのづから趣を異にす。思ふに西洋史を学ぶもの、わが国の世界における位置とわが国民の責任とを自覚すると共に、国史、東洋史には見るべからざる歴史上の教訓の甚だ貴重なるものあることを悟るべし。(62)

ここには、坂口のその後の史観を予兆させる見解と意欲とが語られている。また、同書の「例言」では、「概括力に乏しとは、従来中等諸学校生徒の学力に対して加へられたる非難なり」として、「本書」では「史実の連絡に留意し、力めて叙事の岐路に入るを避け、各時期の終には概括表及び摘要を載せて、社会の変遷、邦国の盛衰に関する明晰なる概念を得しめ、また上古、中世、近世、最近世の毎編の終には、披閲に便なる関係西洋諸国、本邦、東洋諸国の対照年表を附して、時間上の明確なる観念を與へんことを期せり」と述べている(63)。

本編の構成を略述すると以下のようになる。各期については、それぞれ数章から十章程度で組み立てられている。

第一篇　古代史（地中海沿岸の時代）
　第一期　東方世界の隆盛
　第二期　ギリシア対ペルシア
　第三期　ヘレニーマス風文化　ローマの武力
　第四期　ローマ帝国
第二篇　中世史（地中海及びヨーロッパ沿岸時代）
　第一期　ローマ帝国の分裂　サラセンの勃興
　第二期　神聖ローマ帝国　十字軍
　第三期　教会と封建との衰微　オスマン＝トルコの勃興
第三篇　近世史（大西洋利用の時代）
　第一期　近世生活の開始　宗教の革新
　第二期　専制の流行　イギリスの発展
第四篇　最近世史（世界交通の時代）
　第一期　フランス大革命　ナポレオン戦役
　第二期　自由主義及び国民主義の発達
　第三期　通商植民策の隆盛

(62) 坂口・中村、前掲『中等西洋通史』、本文1-2頁。
(63) 同前、1-2頁。

この構成で注目されるのは、第一篇から第四篇の各篇の括弧内の表現である。「緒論」にある通り「人類活動」の圏域に着目した区分で、その視点は現在でも新鮮である[64]。

「世界史発展の階段の分ち方」について、坂口は「最も便宜の良いのは人間の歴史が地球上に拡大して行く階段を辿るやり方」すなわち「外交関係」に着目することであるという。この場合の「外交関係」は、国家間関係というよりも文明の接触に力点をおいて理解すべきであろう。というのも、坂口は、世界史の発展段階の区分には「河川、湖沼或は沿海とか、内海、海洋、大洋等が大切な機関」となり、「河川文化時代」、「沿海文化時代」、「大洋文化、大海文化時代」の三段階に区分できるとしているからである。そして、近代になって第三段階に入ったが、この「大洋文化」は東洋からではなく、西洋から発展してきたという点が近代の世界史の最大特徴であるとも付言している[65]。

坂口の叙述に明晰さが伴っているのは、図式的対比が効果的に用いられているからでもある[66]。古代ギリシア史についても、「世人が世界史全体を分つが如く、上古・中古・近古及び現代の四大変遷があった」として、ヨーロッパのルネサンスのようにギリシアのルネサンスと名づけたい哲学の展開が見られたとの事例が挙げられ、広角から近接へ、鳥瞰から拡大へ、とレンズの焦点が自在に変わるように例示されていく[67]。

坂口の著作に登場する主な概念としては、「ポリス」、「コスモポリス」、「国民」、「民族」、「帝国」、「国家」、などが挙げられる。

坂口が熱心に取り組んだ古代ギリシア史とヘレニズム文明に関する解釈をみてみよう。ギリシア文明の特色は「当時特有の都市国家生活の産物である。」[68] その後アレクサンドロスの出現と東方遠征によって、ギリシア世界は急激に拡大し、同時にギリシア人の考え方も一変した。すなわち、「世界主義と個人主義といふ二にして実は一なる傾向」を帯びるに至った。換言すれば、「都市国家といふ狭隘な範疇を脱却して全世界を家とするものとなり、到る所に於て世界人として、また世界の先覚者として活動することにな」り、従前のギリシア文化は都市を国

---

(64) しかし、1926年に発行した『中等教育西洋史教科書』では、時期区分は変わらず、新に「第五編 現代史」が加わるものの、このような表現は影を潜めている。また、「例言」でも「近世・現代に進むに従ひ、漸次その記述を詳しくした」という点が目新しい程度で、本書の構成に関する表面的記述に止まっている（坂口昂『中等教育西洋史教科書』東京開成館、1926年、1頁）。

(65) 坂口「世界史より観たる太平洋問題」、前掲『世界史論講』、274-276頁。

(66) この傾向は、リースから受け継いだものかもしれない。前述のリース著「伊藤公」について、「日本のビスマルク[＝伊藤のこと]の生涯の主要なモーメント毎に、しば〳〵適切なパラレルやコントラストの方法が世界史上から用ゐられてゐること」は「日本人の参考になる」と評価している（坂口、前掲「日本のビスマルク」、前掲『世界史論講』、754頁）。

(67) 坂口昂『世界に於ける希臘文明の潮流』岩波書店、1948年（改版、原著は1924年）、2-10頁。

(68) 坂口、前掲『概観世界史潮』、26頁。

家にして「小国並立」を「考察の標準」としていたが、爾後は「世界を思想の対象とするものにな」った[69]。

坂口は、アレクサンドロスによって、古代ギリシア人は「国家なき人民」、「亡国の民」になった、とする[70]。しかし同時に、ギリシアの「国民的文明」は「世界的文明」となり、「都市国家（ポーリス）の文明」は「世界国家（コスモポーリス）の文明」（ルビママ）となった。世界各地にギリシア文明は伝播し、各地固有の文明と接触融合してそれぞれ特殊の複合現象を形成するようになった。これは17世紀のオランダ文明、18・19世紀のイギリス文明が東西に伝えられて「一種の流風を成したが如きに異ならない」としている[71]。

坂口は、「亡国の民」になったギリシア人を評価しているわけではない。「都市国家並立の状態にあったからあのやうな運命に陥ったのである」。こう断ずる坂口は、「国民主義を把持しつゝ世界主義個人主義を摂取すること」の重要性を指摘し、両主義の調和は、「国家の性質」、「主権者の性質」、「国策の立方」、「国民の覚悟操持如何」によって可能であり、イギリスがその好例であると述べる。それに続く以下の指摘には、坂口の信条が反映されているともいえよう。

> 両者具備は孰れの時代の国際間にありましても絶対に必要であらうと信じます。世界主義個人主義と相容れぬ国民主義は盲目的であり、偏狭であつて却て国家を亡ぼします。昔の猶太人はその適例でありませう。但、国民主義を失つた世界主義個人主義が悲むべきものなることは申すまでもありませぬ。[72]

「国民」ないし「民族」は、「幾多の文化因子の輻湊による歴史的発展に基づくもの」で、「一国民の結構竝に造作」は「国家の政策」、「社会の文化運動」、「世界の国際関係」によって決定される[73]。坂口にとっては、「国民の文化」とは「悉く歴史的の（ママ）発展であ」り、「国民性」は「先天的個有のもの」ではなく、「歴史上の産物」で「能動可変のもの」であった[74]。そもそも、「民族性」・「国民性」・「国民精神」・「時代精神」などの術語は、いずれもその起源をフランス革命、ナポレオン戦役の時代に発していると坂口はいう。「ローマンチック派」は、好んで「民族性、国民性を説き、之を金科玉条として居る。」[75] 一方、フィヒテやヘーゲルらの哲学者は、「世界には絶対最高の精神があり、一定の設計があ」り、それによって「一の時代から他の時代へと進み行くやうに絶対的に摂理

---

(69) 坂口「アレクザンドル大王の文化的使命」、前掲『世界史論講』、57-58頁。
(70) 同前、61頁。
(71) 坂口「アレクザンドル大王の東征」、前掲『世界史論講』、136-137頁。
(72) 坂口、前掲「アレクザンドル大王の文化的使命」、前掲『世界史論講』、61-62頁。
(73) 坂口「英国の民族及び国民」、前掲『世界史論講』、270-271頁。
(74) 坂口「古代史研究の発展につきて」、前掲『世界史論講』、350-351頁。
(75) 坂口「時代の趨勢と史家の任務」、前掲『世界史論講』、574頁。

が出来て居る」として、「各時代には世界精神がその時代精神となって現はれ」、「人生はこの設計に従ひて一定の順序を逐ひて進歩し各時代精神を現はしつゝ、一定の大目的に向つて進行到達しつゝありとして居る」。このように「ローマンチック派」と「精神哲学派」とを対比した上で、「歴史家」は、両者と「共通の雰囲気を味ひ相互助成を自認しながら」、両者いずれにも組することなく、「或る一時代を通じてその間に卓越貫通する有力なる思潮を求めようと努力する」という。この「思潮」が「時代思潮」であり、「古来の伝来的勢力によりて、必ずしも一から十まで全然支配されるといふものではなく」、また「予定されたる前途を馬車馬的に辿りゆく運命を有つて居るものでない」。要するに「時代思潮」は、「古来の伝来性と現在起りつゝある創見的活動的新勢力との相互関係によりて生ずるもので、随て人間の自由意志の力をも認めたものである」というのが坂口の結論であった[76]。そこには、「人生の歴史は一の発展である、国民性も時代精神も皆然り、現在は過去からの発展である、これと同じく未来は現在の発展如何に繋つて居る」[77]という一種の発展的な史観が存在していた。

アレクサンドロスの試みは、「すべての人種、宗教、国家の差別を超越したる一大世界的国家の創建の試み」で、「世界的帝国政治の企図」の先駆であると評した坂口だが[78]、ドイツの「帝国思想」については次のように述べている。まず、「独逸帝国思想」は「帝国主義（イムペリアリスムス）」、「世界政策（ウエルトポリチツク）」（ルビママ）の由来とは無関係であるとして、ドイツ国民の間にある「カイゼル」・「カイゼル・ウント・ライヒ」・「カイゼルライヒ」という思想を単に「帝国の思想」と名づけるに過ぎないという。これは、「一種のロマンチックな、ミスチックなアイデヤを指した」のであって、「直接に帝国主義とか、世界政策と云ふやうなものを指したのでは」ないとしている[79]。ローマ帝国から発したドイツの「帝国思想」は[80]、中世においては「世界的」であると同時に「空想的」で「ミスチック」・「ロマンチック」が勝っていた[81]。しかし、「一種独逸の国民的運動の発現」であるルターの宗教改革などが起り[82]、次第にこの傾向が変化していった。そして、「現独逸の帝国思想は国民的基礎に立って居る、即ち現実的基礎に立って居る」。もっとも、ヴィルヘルム二世が「神祐主義（ゴツテスグナーデンツム）を吹聴し、王権は神権であるといふ風な思想」（ルビママ）を語っている点などに鑑みれば、「今日の独逸にも尚ほ頗る多くロマンチック、ミスチックな要素があるのではないか」と坂口は結論づけている[83]。

---

(76) 同前、575-576頁。
(77) 同前、577頁。
(78) 坂口「アレクザンドル大王の東征」、前掲『世界史論講』、153頁。
(79) 坂口「独逸帝国思想の由来」、前掲『世界史論講』、207頁。
(80) 同前、210頁。
(81) 同前、225頁。
(82) 同前、218頁。
(83) 同前、225頁。

ヴィルヘルム二世のエルサレム・コンスタンチノープル訪問、バクダッド鉄道建設、などの所謂東方政策に力を注いでいるドイツをみれば、「中古以来の神秘的なる帝国思想が最近竝に現時の独逸帝国の現実政策に多大の油を注ぎその帝国主義又は世界政策に資する所少からざることと思はれる」として[84]、最終的には「帝国主義」・「世界政策」に結びつけることも忘れてはいない。

如上の「帝国思想」を有するドイツに関しては、「知識界」を中心に長らく「政治的国民的国家観念の熱烈が欠けて居た」が、ナポレオン戦争での屈服やシュタイン改革の開始以来、「この知識界は祖国の悲境に感憤し、一転して国民的国家的となった。」[85]「国民的国家観念」ついてこのように述べる坂口は、ドイツという「国民的国家」及びその歴史という概念が出来たのは頗る新しく、それはドイツ民族の歴史的発展のしからしむる所であると評している[86]。また、イタリアに関しては次のように述べている。

> 最も進歩し、最も富有なるイタリアは国際上最も危険な位置にあった。即ち半島内の列国が相対峙独立して居る宛ら巧妙なるからくり装置の如き形勢は長く保持さるべくもなかった。……十九世紀に於ける国民統一に至るまで約三百年間、イタリアは国民的国家としては、殆んど全く無勢力であるといふ運命を有って居る。(傍点ママ)[87]

これらを総合すると、坂口は、分立国家を否定的に捉える一方で、国民国家的な熱情を肯定的に捉えている節があるといえよう。

坂口は、「所詮、私の中心観照は、一切文化の歴史潮流を辿りて之を綜合するに在る」と『概観世界史潮』の「自序」で述べている[88]。そのために「文化的潮流」の裡で世界史の潮流を概観し、観察は、「西洋世界史の文化的史潮の上に向けられる」[89]。一見「文化史」重視の姿勢に見えるが、「文化史的史潮といっても、このものが、決して国家の政治上実生活を抜きにしては完全に考へられ得ないものであることは、勿論である」[90] とか、「文化史と言ふ語は近時の流行なるが、吾人の見る所では決して国家又は政治を蔑視すべきでない、国家及政治は文化の中心点である」[91] と坂口は述べている。これを見ても、坂口のいう「文化史」は、たとえば作者・作品論に傾斜した表層的な「文化史」ではないことが

(84) 同前、226頁。
(85) 坂口、前掲『概観世界史潮』、325頁。
(86) 坂口昂『独逸史学史』岩波書店、1932年、148頁、及び前掲『概観世界史潮』、178頁。
(87) 坂口、前掲『概観世界史潮』、178-179頁。
(88) 坂口、前掲『概観世界史潮』、2頁。
(89) 同前、12頁。
(90) 同前。
(91) 坂口、前掲「古代史研究の発展につきて」、前掲『世界史論講』、351頁。

わかる。同時に坂口は、「国家を唯一の標準とする」考えもまた偏見であり、「文化の名の下に自然科学的の法則又は形式的階段を設けてこれに一切の史実を投込んで仕舞ふといふ傾向を有するバックルやラムプレヒトの如きも、是亦歴史を逆に考へて之を窮屈にするもので決して文化科学（クルツーアウヰツセンシヤフト）たる歴史を取扱ふに当を得たものでない」（ルビママ）という[92]。

このように考える背景には、坂口が、諸学の連携の上に成り立つ総合的学問として史学を位置づけていることが挙げられる[93]。同時に坂口がランケの史学に共鳴していることの現われでもある。坂口は、ランケについて、「民族及び国民を自己の対象とし」ながら、「ローマンチック者流の大勢である在野的民主的傾向に全然雷同する」ことがなく、「一方に偏しないで、物の両面を包容して居る」と評している[94]。その上で、坂口は次のように指摘する。

> よしやローマンチックに感じたにしても、遂にその急進的自由主義に馳せなかった。換言せば、彼の生立によって制約された彼の史学は、尚ほ本質的には自主自立を失はないで、而も大なる時代の風潮によって幾分のローマンチックの衝動とその利益を受けて向上し、且つプロシャ王国の保護を被って大成したと言へる。[95]

要するに、「歴史家としての彼［ランケ］の進みゆく路はいづれにより多く傾いたかと云へば、民族及び国民のためにする君主的国家主義に在った」[96]というのが坂口の結論であった。

18世紀のドイツ史学が「古典主義」・「合理主義」・「人性主義」・「世界公民主義」といった、所謂「哲学の世紀」の風潮に発した「政治的利害、国民的偏狭に囚はれず、理性的、人生的、世界公民的であるといふ傾向をもっていた」とすれば[97]、19世紀中葉は、「『学者政論』（Professorenpolitik und-publizistik）の時代」であった、と坂口はいう[98]。ランケも一時、『歴史政治雑誌』に関係したが、数年にして失敗して以来、現実の政界に志を絶ち、国民輿論相手の直接政治運動には少しも関係せず、四十八年革命でも同様であった[99]。「国家の本質は、第一に権力である。第二にも権力である。第三にも権力である。」[100]こう主張するトラ

（92）同前、351-352頁。
（93）坂口「宗教史の研究と史学」、前掲『世界史論講』、356頁。
（94）坂口「ローマンチック時代に於ける一青年史家の生立」、前掲『世界史論講』、405-406頁。
（95）同前、420頁。
（96）同前、405頁。
（97）坂口、前掲『独逸史学史』、429頁。
（98）同前、432頁。
（99）同前、433頁。
（100）同前、464頁。

イチュケ（Heinrich Treitschke、1834 - 1896年）について、坂口はランケとの対比を明瞭に指摘している。「私の血液は、悲しいことには歴史家としては、余りに熱し過ぎて居る」というトライチュケの言葉を紹介しながら[101]、トライチュケは、専門家以外の門外漢が史学に容喙することを排斥し、「政治史」が「文化史」以上に「重要なる意義を有すること」ならびに「指導的人物が決定的役割を占めること」に賛意を表した、ことなどを述べている[102]。「彼は史家たらんと力めたけれども、結局は政論家であったのである。」[103] このように、坂口のトライチュケに関する評価は簡明である。

如上の対比から窺えるのは、坂口が「史家」と「政論家」とを峻別すると同時に、「史家」の要件としての節欲、特に政治的節欲を重視していたことである[104]。

4――現代史の捉え方と歴史家の任務

前節で紹介した『中等西洋通史』の「緒論」に見られる「日本は世界の日本なり」という一節は、竹越與三郎―西園寺公望―陸奥宗光という人脈を髣髴とさせるものである[105]。現時点でこれらの人物たちと坂口との直接の関わりを示す史料はないが、西洋史家・世界史家として同様の結論に早くから到達していたとすれば、坂口の史観と対外認識との関わりを示すものとなろう。本節では、坂口が第一次世界大戦後の状況をどのように捉えたのか、また、その中で日本の位置づけについて如何なる見解を有していたのかを検討する。

坂口は、東京帝国大学在学中の1895（明治28）年から「観潮録」という日記を書き始めた[106]。日清戦争に関しては次のような記述がある。

> ［1895年］六月、之より先、朝鮮国東学党なるもの蜂起し口を西洋主義排斥（即ち日本人）に籍り奸吏の暴剣に苦呻せる流民を扇動し官吏に反抗し今春に入りて漸く猖獗、京城戒厳す、清国使臣袁世凱当路を慫慂して清国の援を

（101）同前、476頁。

（102）同前、484頁。また、トライチュケが「国家と社会は一つで不可分離である。只国家は、統一的に秩序づけられた社会である。近時人或は社会の学を国家の学より分離せしむる者がある……。是は誤りである」と考えていた点にも言及している（同前、453頁）。

（103）同前、489頁。

（104）坂口は、宗教にも十分な理解を示していたが、自身がその中に入ることはなかったとして、教え子の一人は次のように回想している。「先生は自分は門まで行くが、中へは入らないと申されて居った。先生は凡そ実際運動に対しては純粋客観の態度をとられた。」（中原與茂九郎「心の貧しき者は幸なり――坂口先生に最後にお目にかゝった日のことなど」、前掲『芸文　坂口博士追悼号』、69頁）

（105）これら三者の関係と雑誌ならびに新聞『世界の日本』については、拙稿「竹越與三郎のアジア認識」、斎藤聖二・桜井良樹・黒沢文貴編『国際環境のなかの近代日本』芙蓉書房出版、2001年、133-166頁、及び「陸奥宗光の死と政界再編――日刊『世界之日本』をめぐって」、『和光大学人間関係学部紀要・第７号第１分冊 現代社会関係研究』2003年３月、56-78頁、を参照。

（106）前掲、坂口遼編『ある歴史家の生涯』、43頁。

求めしむ、事已に容易にあらず、清軍牙山に上陸したる一二日後のみにて仁川に入り直に京城付近竜山に進屯す、於茲、我が政府清国に対し朝鮮扶植に関して協議する所あり、然れども彼れ協議を拒絶し且つ違言あり曰く、「朝鮮は吾東藩にして一属邦のみ」と。抑も朝鮮を一独立国と認め之を始めて各国に紹介したるは我が帝国にして実に是れ亦帝国の国是なり、征清の挙是に於て起る。(107)

また、翌1896（明治29）年の記述では日清戦争を振り返って、

明治二十七年の戦役は二千年来涵養したる精神的元気と維新以降特に発達したる物質的文明の一大発表にして内は日本国民、外は世界の史上に劃然たる鴻溝を残せり、……其結果や、世界は大日本なる名称に重きを置き、政治上経済上共に一大勢力として之を遇するに至れり (108)

と記している。「大日本」となった日本が、国際関係上「一大勢力」として登場したという評価は当時において一般的であり、坂口もこの評価をそのまま踏襲している。また、如上の日清開戦経過の概要は、日本政府情報に基づく通俗的なまとめといってよく、必ずしも独自性は見られない。

坂口が西洋史家である以上やむをえないとみることもできるかもしれないが、管見の限りでは、中国・朝鮮を始めとする見聞や指摘は異常なほど少ない。ヨーロッパからの帰路、坂口はスエズ運河を経由して、インド洋航路で日本に向かっているが、帰路の叙述は皆無である。また、欧米巡遊の前に、短期間ながら中国・朝鮮を訪問しているが、その見聞記録も管見の限りでは見当たらない。教科書を除く初の著書が朝鮮総督府からの依頼で調査したポーランド及びアルザス・ロレーヌ地方の教育状況報告書であることを考えれば (109)、このような「節欲」は異様といえよう。

だが坂口は、「高等学校」・「専門学校」の教師・生徒は、できるだけ「朝鮮、満州、支那の要地だけでも見学しうるようにしたいものだ」とも述べている。もっともその理由は、日本人が西洋には手軽に行けないため、「大連、青島、上海、香港において、せめて準西洋風の生活の一端を目のあたりに見る」点にあり、「東洋固有の地理風俗に親しく接しうる」というのは副次的な意味合いで捉えられているにすぎない。こうすることは、「日本の青年の海外思想をひろめ、世界的知見を聞き得て、国民の文化向上に取りて非常の好都合」だろうと述べている (110)。

---

(107) 同前、43-44頁。
(108) 同前、44頁。
(109) 注12参照。
(110) 坂口、前掲『歴史家の旅から』、96-97頁。

坂口にとって、「世界的知見」とは何よりも「西洋」のものであり、それに代替するものが、租借地ないし植民地の「準西洋風」のものであったといえよう。そして、その意味での「世界的知見」や「海外思想」が普及することは、「文化」の「向上」につながるものとして捉えられていた。

ローマの事例を引いて植民地領有の意味を坂口は次のように述べている。第一次ポエニ戦争（紀元前264 - 紀元前241年）で、ローマ共和国は初めてイタリア以外に領土を獲得した。それがシチリアで、属州の始まりである。「この島の領有は猶ほ近時、日本が台湾を領有し、米国がキューバ及びフィリッピンを確有した如く実にローマが世界の列強に成り上がって而もその均勢を破壊する端緒である。」(111) だが、坂口は本当に日本の植民地領有を「均勢を破壊する端緒」と考えていたのだろうか。前述のリースの「伊藤公」について、リースが「伊藤公晩年の畢生の事業たる朝鮮統治を描き、その寛大仁恵なる文明的施設を賞賛して」いる点を、坂口はそのまま紹介している (112)。また、第一次世界大戦中から「民族自決主義」が「聯合側から高唱され、既に講和会議に於て若干多数の民族に適用された」とした上で、適用されなかった民族の間では「この新提唱に煽られて、一層不平を高むるもの少くはない。現に朝鮮人の内には、中国、シベリア、米国等を策源地として、内外呼応して独立を企つるものがある。唯だ政府及び総督府の堅実なる統治策はよく半島を鎮撫して居る」と評している (113)。三・一運動を経た後の「文化政治」期の朝鮮植民地統治について、何をもって「堅実なる統治策」といい、何を指して「よく半島を鎮撫して居る」というのか、全く不明である。「ロマンチック」の中から「国民」が生起する意味を十分把握していたはずの坂口が、「民族自決主義」を日本の植民地には適用除外して考えていたのだろうか。

この点に関して、坂口の中では、朝鮮と台湾との位置づけは異なっていたのではないか。こう考えることは十分可能であろう。朝鮮や「北進」に関する指摘は乏しいのに対して、「太平洋問題」――それは台湾や「南進」とも関わってくる――については、かなり詳細な叙述を残しているからである。

まず、「太平洋問題」という術語は、1921年のワシントン会議でできたものだが、世界史の過程から見ると、「海軍問題」は「世界の平和」という「目的を達する手段」であるから、「海軍問題」よりも「太平洋問題」の方がより重大である。坂口はこう述べる (114)。「久しい間文化世界」＝「歴史」が無かった太平洋を「利用しうる方向姿勢をとっているのは支那、日本等のアジヤの住民でなければならぬ。」(115) だが、大陸横断鉄道とパナマ運河の完成などにより、アメリカは西

(111) 坂口、前掲『概観世界史潮』、47-48頁。
(112) 坂口、前掲「日本のビスマルク」、前掲『世界史論講』、754頁。
(113) 坂口、前掲『概観世界史潮』、542頁。
(114) 坂口「世界史より観たる太平洋問題」、前掲『世界史論講』、272-273頁。
(115) 同前、277-278頁

方及び太平洋方面へ発展してきた。そして「人口及び移民問題」が浮上してきた[116]。

このことが太平洋問題を一層「激成」しているが、そこには「歴史的根本理由」が横たわっているとして、次の四点を指摘する。（１）「無限に達するあこがれ、高遠に対する努力の有無」に関する「東西の相違」＝西洋文化には全世界を一つとして統治すべきとの理想があること、（２）国民国家の存在の有無＝西洋では国民的国家が出現したこと、（３）国民的国家樹立運動における個人の自覚と資質の差異＝「東洋の民族には西洋の国民に比して欠ける所が多かった」こと、（４）「知識開発の結果」、「技術の進歩」が見られるようになったこと。これらの四点が世界史における東西文化発展の相違をきたした文化的精神的な根本理由であり、その結果として太平洋は「主として西洋人の努力によって開発されて全世界に於ける『地中海』の如くになって来た」という[117]。

中国との対比を念頭に置いて、坂口は、日本が国民国家樹立については東洋の中でも日本の独自性を強調している。日本はいち早く西洋文化の長を採って時勢に遅れない国家を形成し、日本固有の社会を結束したため、東洋に於て自ら維持し、太平洋問題にも有力な発言権を有することとなった、という。要は、「現代国家の樹立されてゐるや否やが勢力の分岐点」であった[118]。19世紀末から20世紀初頭にかけての10年間に、「極東に於ける権力関係が一変」したと坂口はみる。すなわち、「日本島帝国の勃興」、「尨大なる清帝国の老朽羸弱は曝露され、欧米列強の頓みにこの方面に対する突進を開始したからである。」そして、「日本民族が始めて強国民として世界史に入ったのはこの時期」であるという[119]。

それだけに、日本が「第二のロシヤとなつて支那の門戸を閉鎖するのではないかと、日本を疑ひ嫉むやうになつて来た。」[120] 第一次世界大戦前にドイツ留学中に、坂口自身が「日本は先年旅順をやつたやうに此の次に何処を襲撃なさりますか、青島をやるのではないか但しは布哇をやるのではないか」などと言われた経験を披露し、ドイツ人が「日本を剣呑な交戦国民と決めてよく調戯つたものです」と述べている[121]。また、この間「アメリカの発展」も見られ、「モンロー主義の本国の帝国主義化」が顕著となった、という[122]。

坂口の東アジア国際関係史に関する叙述は、西洋のそれに比すれば、通俗的な一般論の域を出ず、平板な図式的理解に止まっているという感が強い。だが、「民主主義及び社会主義は二十世紀の今日全世界の大勢である」[123] と断言する坂

---

(116) 同前、284頁。
(117) 同前、293-298頁。
(118) 同前、296頁。
(119) 坂口、前掲『概観世界史潮』、430頁。
(120) 坂口「世界史より観たる太平洋問題」、前掲『世界史論講』、285頁。
(121) 同前、286頁
(122) 坂口、前掲『概観世界史潮』、435頁。
(123) 同前、436頁。

口は、明晰である。ヴィルヘルム2世の下でもドイツ社会民主党の党勢が拡張している点を踏まえて次のように述べる。「カイゼルの赫々たる帝国は、その文化政策の発展と国力の充実とに拘らず、社会の下層、殊に都市に於ける労働階級を通じて、民主的風潮の横溢しつゝあることが察せられる。」(124) この背景には、20世紀に入って大資本が合同連合して小資本ならびに労働者を圧迫し、「大資本家が軍国主義と結託して利益を独占する傾向が著しく現はれた」。このため、「世界の輿論は再び不満となり、社会主義者流に有力なる反抗運動の口実を与ふるやうになって居」て、「遂に世界戦乱が破裂した」という (125)。

この文脈で、マルクスの思想については、ヘーゲル歴史哲学とイギリス産業革命後の社会の現実との二つを結びつけ、「現代固有の経済的社会生活の原則を立てた」として、「十九世紀に於ける社会に関する哲学思想の中に於て最も高き最も大いなる位置を占め、且つ同世紀に於て、ヘーゲルの弁証哲学とダーウィンの進化論と相竝びて、世界の思想界に対して最も偉大なる感化を及ぼしたる三大思想の一となって居る」と公平に評価している (126)。

19世紀中葉以来、「十八世紀を思ひ起さす純理的傾向再び頭を擡げ、当時に固有なる現実主義と提携して、一種の強烈なる唯物思潮を捲き起し、自然界は勿論人事界に至るまで、一切の事物を支配せずんばやまない勢を呈して居る。」このようにいう坂口は、「ロマンティックの理想主義」に源を発しながら、「現実主義と現実政策といふ動力を受けて始めて活躍して来た」国民主義の作用を十分把握していた。ドイツ、アメリカ、イタリアなどで、「国民主義」は国家統一の理想を満たしたが、こうして形成された「国民的国家」は「国力充実の余勢、更らに一歩を進めて全き地球上の向つて自己の世界政策を展開することになった。」これが19世紀の後半三分の一世紀以来の「世界の大勢」であった。その結果、「かくの如き列国の世界政策の展開は、こゝに全地球に拡がりて広大複雑にして神経質的に敏感なる世界文化といふ一大共通生活の現象を喚起し、之と同時にこの共通生活の基礎が依然として国民的国家の上に立つが故に、十九世紀末つ方より、漸次彼等の世界政策の衝突を馴致し、二十世紀に入りて益々風雲の急を促進し、遂に曠古未曾有の世界大戦乱の爆発を見、所謂アルマゲドンの戦とはこれかと人をして怖れ慄かしむるに至った。」(127)

そして、「各国政府はとかく軍国主義を立て、国防のためと称して軍備の競争」に邁進する。彼等は「平和維持のために武装するのみ」との「武装平和主義を主張する」が、その主張者は「啻に之を本職とする政治家及び軍人ばかりでな」く、「平和的経済的事業を職分とする者の内にも、亦た大いに之に與って居るものが

(124) 同前、469頁。
(125) 同前、452-453頁。
(126) 同前、443-444頁。
(127) 同前、10頁。

あった。即ち一方には特殊資本家である。……是等は軍国主義と相消長する営利業者である。他方では学者、詩人、歴史家の内に軍国主義の鼓吹の一群があった。」「特殊資本家」とは、クルップ、アームストロング、シュネーデルのように「軍国主義と相消長する営利業者」を指す。学者、詩人、歴史家のうちの「軍国主義の鼓吹の一群」は、「学術上から、進化論が確立した生存競争及び適者生存の原理を国民及び人生の生活に適用して、戦争を人文発展上欠くべからざる因子として是認推奨して」いて、「国家生活が二十世紀初期の世界政策の展開といふ大勢に牽かれて、激烈なる生存競争に入ると同時に、資本家及び学者等の一部が之に呼応して軍国的衝突の傾向を煽って行ったから、民主論者や、社会主義者や、平和主義者や、宗教家らの戦争防止運動は、事実に於て、軍国主義者の後へに瞠若たらざるを得ざる有様にあった。」(128)

第一次世界大戦を中心とする現今の趨勢については、「少くとも国民的国家の世界政策を実行せんとする軍国主義と、一般民衆の安寧幸福を主張する社会的平和主義との対抗となりつゝあるは確実であって、そのいづれが果してランケ派の所謂世界を支配する時代思潮となるべきかは、本戦局の結果を待つの外ない。」(129) こう述べた坂口だが、戦後になっても明確な結論には到達できなかった。たとえば、日本の場合をとってみても、第一次世界大戦中の変容の大きさに坂口自身が圧倒されている。

> 日本に於ける戦時中の社会変動は実に驚くべきものがある。戦時工業、戦時海運、戦時通商の急激なる発展につれて、国内の富の蓄積、資本主義の横溢、物価の暴騰、生活の困難、思想の民主化、労働者の同盟罷工の頻発、普通選挙の要求など、従来見るべからざる痛切なる社会問題の頓みに竝び発生するを看た。……更らにこの重苦しい気分を増すものは、その外に横はる外交問題である。即ち、山東事件を中心とする中国の排日問題、シベリア出兵の善後問題、多年懸案の日米関係問題、満期に近づきつゝある日英同盟の存廃問題等これである。(130)

内外の「問題」が山積し、行詰り状態に陥っている第一次世界大戦後の日本の状況と同時に、それをどう把握するのかに戸惑っている坂口の姿が浮かんでくる。最終的な判断はもう少し先延ばしせざるを得なかったらしく、以下のような叙述で結んでいる。

---

(128) 同前、496-497頁。
(129) 坂口「時代の趨勢と史家の任務」、前掲『世界史論講』、576頁。
(130) 坂口、前掲『概観世界史潮』、541頁。

おもふに、世界戦役が直接に決定した世界の権力関係変化は、一方、露独の各雌伏、汎スラヴ主義、汎獨主義の全敗である、他方、イギリス海上帝国の優勝と、アメリカ資本主義的統一共和国の雄飛とである。フランス及びイタリアは疲れて強国としては殆んど無力に近くなり、日本は所詮国力の成上り者にして、寧ろ意気を以て勝つのみ。世界は畢竟アングロ・サクソンの天下となったのである。転じて思想上から見るに、戦役が産出し、若くば促進したる重要傾向は、新軍国主義、民主主義、国際聯盟主義、民族自決主義、過激主義の類である。これらのいづれが勝利を占むべきか、将た、新理想主義の下に、如上の一切の戦役から起りたる最近の傾向を調容統摂したる平和主義が優勝すべきか。たゞしは、後者が唯の文化主義者の空想の裡に消えて了ふべきか。これらは、すべて今後の問題に属する。而してすべての傾向の眼ざすところの目的が、唯一つの標語に集中して居ることは、確実である。曰く世界改造！……私が開講第一に便宜上予見したるが如く、『世界史の第四日』といふ何か新しい世界文化の日が、今や開始されつゝあるのではあるまいか。(131)

坂口は、歴史という「無限なるローマンス」の「悠久なる活劇の只だ過去のみが吾人史学者の直接使命に属」し、「既往に徴して将来を卜するが如きは、世上の読史家の特権に委すべき」であるとする。また、今後の展開を「目的論的に考察」したり、することは「歴史哲学の自由」であり、「一個の世界史家としての私の任務」ではない、ともいう(132)。

要するに、「史家」は節欲を守り、過去の活劇を活写することにその使命は存し、今後の展開と予測については、問題点ないし問題要素の指摘に止まらざるを得ない。これが、「世界史家」坂口昂の姿勢であった。

――おわりに

坂口によれば、古典（Classics）とは元来 first class を意味し、其の形容詞を省いたに過ぎない。したがって、最高等の義であり模範ということになる(133)。西洋史家坂口にとっての古典とは、ギリシア・ローマを源とする西洋であった。その意味で「歴史家の旅」も「古典」を求める旅であったといえよう。東洋の記述がそこから脱落するのも当然ではあった。

だが、単純な懐古趣味に陥ることは歴史家である坂口には無縁であった。国民

(131) 同前、542-543頁。
(132) 同前、543頁。
(133) 坂口、「進講録草案　第一日　希臘の政治の実際と理想」、前掲『世界史論講』、3頁。

国家の発生と隆盛を冷徹に把握している坂口は、同様に社会経済の状況を直視し、民主主義や社会主義の思想と運動が19世紀から20世紀にかけて次第に盛んになってきていることを認めている。その上で、大きな世界史的変動が間近に迫っていることを感得している。それらについて、歴史の展開から当然であるとでもいわんばかりの淡々とした筆致で述べられている点は注目に値しよう。そこには、確かに激昂する熱情家ではなく、史実に埋没することなく史料批判に立脚した解釈を展開する歴史家の姿があった。「あるがままに」示すのが歴史家の任務であるとのランケの言葉は、しばしば自らの考えを紡ぎ出す任務から解き放す役割も果たしてきたが[134]、坂口は節欲を心がけながらも、後者の任務をないがしろにすることは決してなかったのである。

西洋を「古典」とする以上、文明の発展段階的理解に立ち、進歩史観と無縁ではなかったのは明らかである。「太平洋問題」に関しての記述にはその傾向が顕著に見られる。また、非西洋諸国の中での日本特殊論に辿り着く指摘も散見される。だが、文明接触論的な世界史把握は、坂口の特色であり、もしもう十年なりとも長命であれば、「今後の問題」の展開を坂口がどのように見ていったのかは極めて興味のあるところである。もっとも、歴史家は仮定の話をすべきではない、と坂口がいうだろうことは明らかである。

坂口自身の個性、大正デモクラシーという時代、それに京都帝国大学という場、これらが相俟って、節欲を以て冷徹に観察し、解釈し、場面によっては軽妙洒脱に語ることのできる歴史家坂口昂が形成され、存在したといえるのではないだろうか。坂口の早すぎる死と最終的に体系化されずに終わったその史学は、大正デモクラシーの早すぎる終焉と結実しなかった近代日本の民主主義を象徴しているのかもしれない。

［うえの　たかお］

（134）E.H.Carr, *What is History?*, with a new introduction by Richard J.Evans, Palgrave, 2001, p.3.